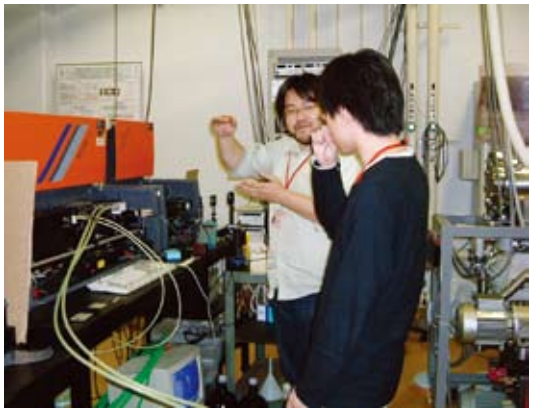
第17回分子科学研究所オープンハウス

2006年6月9日（土）、分子科学研究所においてオープンハウスが開催された。本行事は全国の大学院生、学部学生および社会人を対象に、分子研で行なわれている研究内容を分かり易く解説するとともに、大学共同利用機関の案内および総合研究大学院大学の基盤機関としての教育活動について、外部の方々に広く知って頂くことを目的とした。申し込み総数は35名、キャンセルが1名、当日参加が1名あり、実際の総参加者数は35名となった。西は九州から東は北海道の大学に所属する学部学生、大学院生、研究者が来所した。その内訳は、学部学生12名、修士課程15名、博士課程3名、社会人（民間会社の研究員を含む）5名であった。前年度までは「分子研研究会シンポジウム」と連携してオープンハウスを開催してきたが、本年度は分子研シンポジウム2007を新たに開催し両企画への参加を促した。多くの参加者は所内見学も含めて分子科学研究の最先端にふれ、啓蒙されたのではないかと思う。

当日は先ず、岡崎コンファレンスセンター中会議室に集合して頂いた。受付では分子研案内に加え、極端紫外光研究施設、総合研究大学院大学のパンフレット等を配布した。希望者には学生募集要項を配布した。午後1時から中村所長が分子科学研究所の概要について説明され、続いて永瀬教授から総合研究大学院大学について、田中教授から大学共同利用について丁寧な説明があった。参加者の約半数は、総合研究大学院大学について正確な認識がないこともあり（アンケート結果参照）熱心に耳を傾けていた。

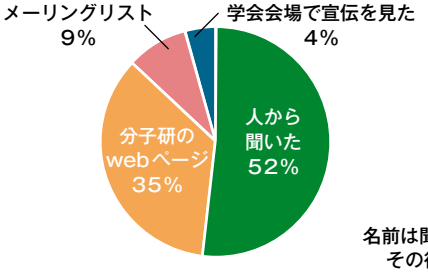


午後1時45分からは山手地区と明大寺地区とに分かれ、自由に分子研所内を見学していただいた。各研究グループの公開方法は、ポスターを掲示して説明するグループや、実際の大型機器を目の前にして懇切丁寧に説明する研究者など様々であった。見学した参加者からも「分子科学という分野の面白さをアピールできており良い内容だった」、「分子研の魅力を再認識した」などの意見が寄せられた。一方企画側からは、「準備していたのに学生が殆ど来なかった」という声が寄せられた。参加者数が年々減少しており、1グループあたりの訪問者数が減ることは否めない。しかし企画側としては多くの研究グループを訪問して欲しい意向があり、次年度以降の改善点としてあげたいと思う。

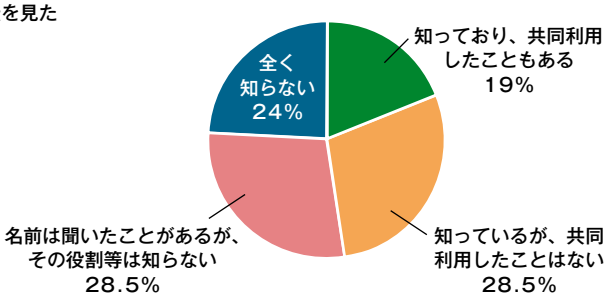
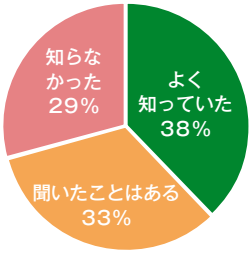
今回の参加者のアンケートから、分子研オープンハウスの存在を半数の学生がウェブページ上で、また半数近くは先生や友人から聞いたと回答している。学会誌や雑誌にも多く掲載し、また大学にも多くのポスターを配布したが、これらに対する解答はわずかであった。分子研OBの先生方は雑誌やポスターを通じてオープンハウスを知る機会が多いと思われるが、現在の情報源は我々が考える以上にネットに依存していることを再認識した。ウェブページおよびメーリングリストでの宣伝をさらに充実させることが、参加者数を増やす鍵となるであろう。

最後に今回のオープンハウスの開催にあたり、所内の皆様、各大学の先生方をはじめ、広報担当の原田美幸様、中村理枝様には大変にお世話になりました。この場を借りて、御礼申し上げます。　（小澤岳昌　記）

オープンハウスを何で知りましたか？



大学共同利用機関は今までどの程度ご存知でしたか？



総研大の存在をご存じでしたか？